

教師横井時雄序

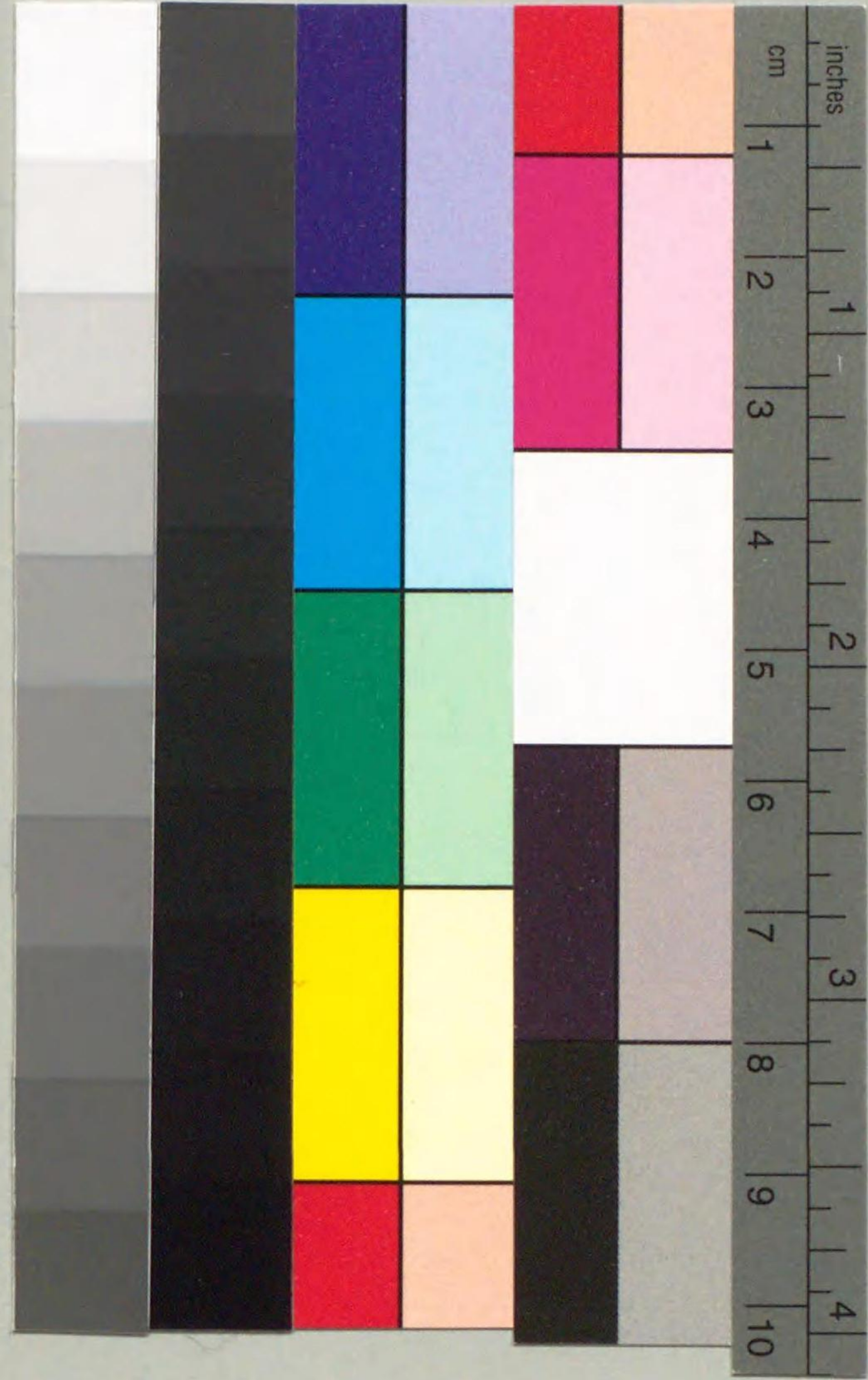
特28-734

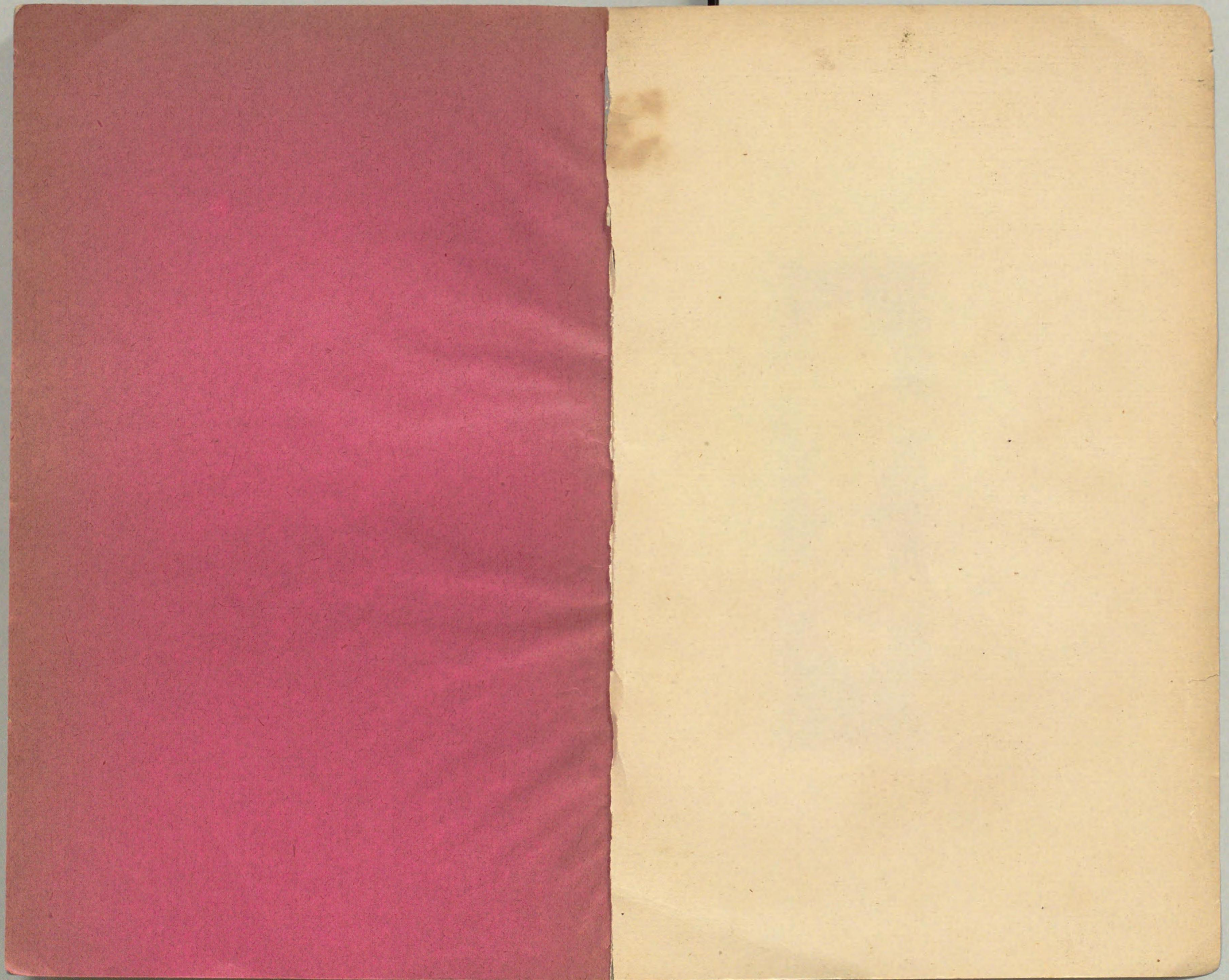


童子



女子史女史





童子序

幼いけあき時代だいは人生じんじの春はるかり、其その信しん仰やうにに富とみみ想まう

像ざうに富とみみ希まう望ぼうに富とみむは猶なほほ陽やう春しゅん發はつ生せいの氣き鬱うつ勃ぼつ

ととて制せいし難がたきあ如ごとし、幼い者しやを教おしゆるものは春しゅん

風ふうに歌うたふて穀こくを良ちやう田でんに詩しくに似にたり、其そのの詩しく

や既すでに樂たのみあり、況いはんや穀こく熟じゆくとして之そのを獲と納いる、

時ときの深ふかき樂たのみあるをや先せん哲てつの言ことばに人生じんじの最もとも清きよ

さ職つとめは母ははたるの職つとめありと云いへり、旨むねあるかな、櫻おう

井い女にょ史し童子どうしのはあを編へんと將まささに梓すゐに上あさん

とすと聞く、豈深く女史の清福を祝せざるを得  
んや

明治二十五年十二月上日 横井時雄誌

緒言

西洋にハ童子のためになる面白い話を容易く書きた本が  
澤山ありますけれども日本にハ、まだ小學校の生徒のよめ  
るやうな話の本ハすけなふ御ざいますから何か童子のは  
なしを書ひてくれろと或人にたのまれましたが私の元來  
話下手ですが童子衆ハ大好きですからリドルや新聞雜  
誌でよんでおぼへてゐた話を俗語に直して此小冊子にい  
たしました素より童子のためですから、わかりやすいやう  
に書きました也へ成人がよんでハ面白くハありますまい  
が多少でも童子方のおなぐさみに成りまたハ親母さんや

祖母さんの家庭のお話の種になれば満足で御ざいます

明治廿五年十二月

著者識す

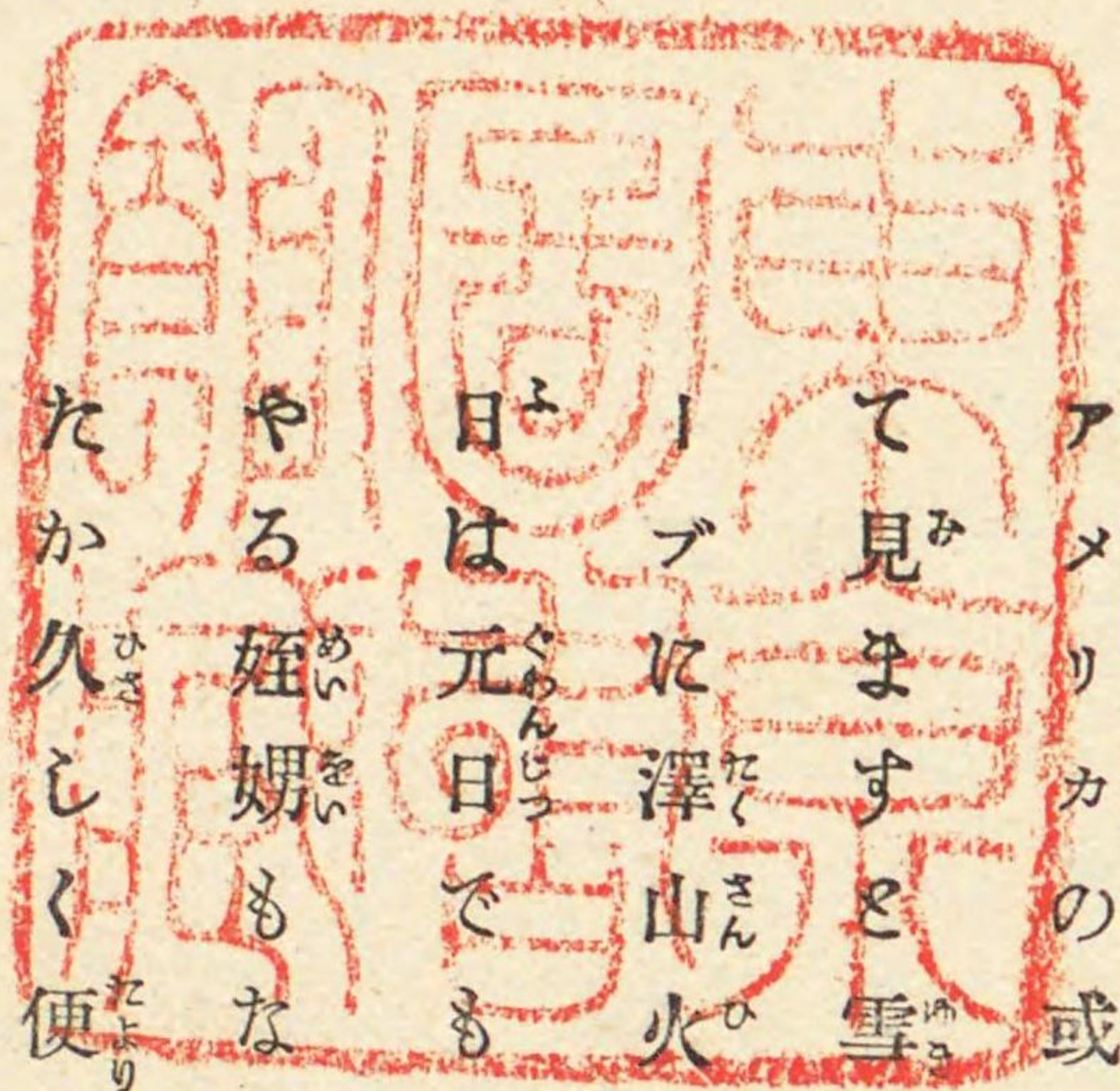
目次

第一	元日の話	九
第二	米國合衆國大統領ワシントン	十九
第三	風船の話	二十三
第四	學校へ行途にて遊んだ娘の話	三十一
第五	一ツの金袋三人を殺した話	四十
第六	シヨンブライトの話	四十二
第七	リンコルンの話	四十六
第八	人を疑ふ娘の話	五十五
第九	馬鹿な猫の話	六十一
第十	他人の過失を見付て自分の過失を知らぬ子供の話	六十四
第十一	一ツ目人の居る島の話	六十六

第十二	落第したる子供の話	六十七
第十三	各々異りたる天才ある話	七十三
第十四	雄雞の話	七十六
第十五	感心な犬の話	八十一
第十六	蝸牛に教へられたる子供の話	八十四
第十七	悪敷すゝめに従ひたる子供の話	八十七
第十八	感心な子供の話	九十九
第十九	佐久間格次郎の話	百六
第二十	大晦日の話	百十

第一

元日の話



アメリカの或所にジョンと云獨身の老人が元日の朝起き  
て見ますと雪がちらくふつてさむひ朝でしたからスト  
ブに澤山火をたいてあたりながら獨で考がへますに今  
日は元日でも誰もお目出たふと云て来る人もなし年玉を  
やる姪もなし淋しき事なり數年前家出せし妹ハ如何し  
たか久しく便を聞ず若し彼の妹に子供があれバ樂しみに  
なるのに其住居も知れずなごいろく考へて居ましたが

やがて上着を着て外に出行きますと手遊屋の前への父母、  
 又ハ祖父祖母に伴はれたる多くの小兒がをりまして手遊  
 屋の主人は客人の間に答ふるにいそがしく気がいの  
 如き有様でしたからシヨンの其側にイみ詠ていまずと十  
 一二才位の小兒が六才ばかりの妹をしきりに、きびんをと  
 る様子でしたから、ををしたのかと思ひ二人の談話を聞く  
 に

姉「スーゼーやおまへ見るばかりでいくから手遊屋へ連  
 れて行つておくれと云つたから、おまへをよろこばせ  
 やうとおもつて連れてきてあげたのに、なぜそんなにな

くのかへ

スーゼー「私もそうおもつたけれどもあのおもちやを見たら  
 去年の元日に父さんがおもちやをたくさん私と姉さ  
 んの寝てゐる所にもつてきて私共にキスをして私共  
 が幸福になるやうにとおいのりをなさいました事を  
 おもひ出したら悲しくなつたもの彼のおもちやを買  
 つて居る娘のきつとみんな父さんがあるから私も父  
 さんがほしい  
 とがんせなく云ひますと姉の前かけで妹の涙を拭ひなが  
 ら

姉「スーゼやおなきでないよ、そんなになくと目が赤くなるよおまへのないた顔をみつかさんが見るとなをみつかさんの病氣がわるくなるよ、もふおだまりよ姉さんがこんどおとなりのおばさんのお使をして、おわしをもらうたら、お前におちやを買つてあげるからいゝ子だからおなきでないよ」

スーゼ「姉さんそれでもなかつにいられないもの彼の少い娘にキスをしてゐる黒ひ鬚のあるおぢさんは父さんのやうだね」

と云ひながらスーゼは又もわつと泣き出しましたから姉

の妹のきびんをとりながら家に歸へろふとしますとジョンは此有様を見てたまりかね急いで手遊屋に入り澤山おもちやをかゝへて大聲に呼びかけて

ジョン「スーゼや伯父さんがおまへたちに澤山お年玉をあげるからおまちよ

姉「汝はどここの伯父さんですか

ジョン「わたしは親切な父さんのない子供たちの伯父さんだよ此手遊はみんなふたりにあけるよ、チャおまへたちの沓はやぶれて指が出てゐるね、それじゃ、つめたくつてたまるまい向ふの沓屋まで一同においで沓を買



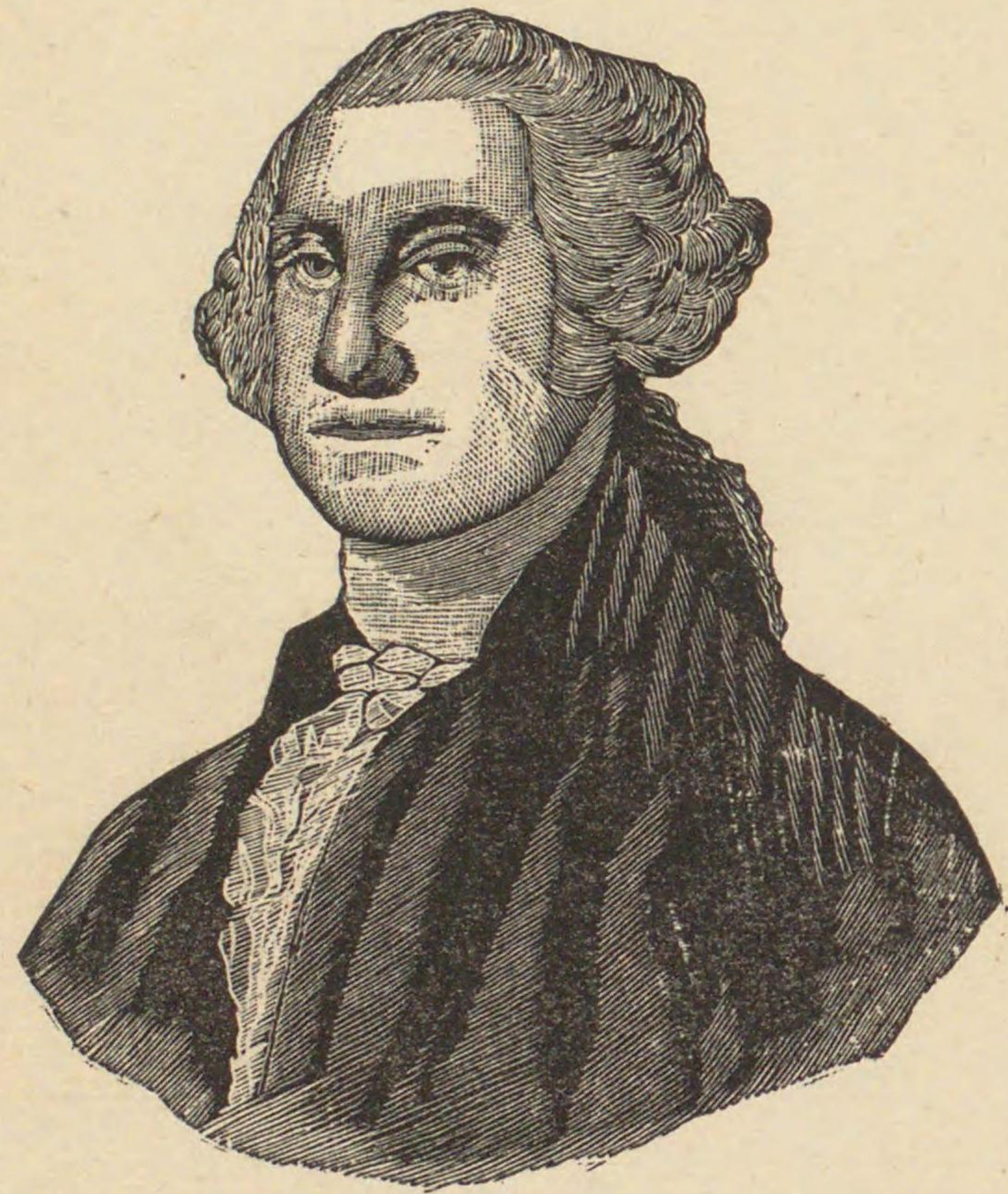
つてあげるから

と云ひながら二人を沓見世へ連れゆきて沓をのかせ又毛糸のかたかけをも買つてやりましたから子供はあまり澤山の物をもらったのをふしぎにかもひまして

「伯父さんこんなにいるくいな物をもらったからつかさんにしかられましよう

「ジョン」そんなこと心配しなくてもいゝ自分の子供に親切にしてもらつて怒る母親の何方にもないから伯父さんがおまへたちの家へ一同にいつて母親さんに話してあげるからサア一同に行かふ

と云ひながら一同に子供の家の方へおきました妹は家の方へ出てシヨンが内にはいるといきなり病氣の母親はシヨンに抱き付て悦びましたから二人の子供はどうしたのかと思ひ泣も笑もせず黙て詠めて居ましたしばらくしてシヨンの子供に向ひ今朝私の父さんのない子供の伯父さんだと云つたがおまへたちの母親の私の妹だから私はおまへたちの眞の伯父さんだよと云ひきかせまして、其後は二人の子供を親切に扱ひましたから子供たちも以前のやうに憐な事もありませんでした、けれどもスーゼン決して父親の事へ忘れませんで常黒髭のある立派の人さへ



George Washington

ワシントンの肖像

見ると姉さん私いどふしても父親の事を忘るゝことが出  
来ませんと云ひました汝がた御両親のある子供しうの仕  
合ですからよく父さんやお母さんの云ふ事を聞ひて善良  
子供にかなりなさい

第二

米國合衆國の大統領ワシントンの話

汝の多分ワシントンの事はおきなさいましたらうけれ  
ども此方ハ有名善良な大統領でありますから汝が此  
方の事をよくおぼへて其行状にあらひなさいますなら  
餘程益になりましやうともひますから茲にワシントン  
氏の寫眞を出してお目にかけ、お話しをいたしましやうと  
おもひます、ゼラル、ワシントンの一千七百三十二年今より  
百五十九年前二月二十二日米國ウヰルジニヤ州に生れま

した、彼の小児の時から正直で柔和くつて學校でもよく勉強しました十六才の時はじめて測量者に成まして其の後に  
 いろ／＼な働らぎをしましたが米國の獨立軍のとき總大將に  
 撰まれました彼の賢明き大將でありましたから兵士  
 のみんな彼を愛して尊敬しました、人民も一同彼をたのみ  
 にして父親のやうにおもひましたから、今でも米國の人の  
 彼を父ワシントンとよびます、七年間の戦争が終りまして  
 獨立國となりました時、彼の其役を辭してウヰルシニヤへ  
 歸りました其後、まもなく一千七百八十七年(今より百〇四  
 年前)に大統領に撰ばれまして八年間其役を信實につとめ

ました其後のウヰルシニヤで閑靜にくらして居ました、彼の  
 死しましたの、一千七百九十九年(今から九十二年)前)で  
 ありました、彼の丈が高くつてなんとなく威光のある容貌  
 の人で御心は勇氣があつて愛國心の強い人でした、此様な  
 人がおつかさんに對していどんなでしたかといへば、まこ  
 とに親切でした、彼がまだ若い時に船乗になつたといふも  
 つて朋友にたのんで口をさがしましたところ、よい所が  
 ありません、たからよろこんで支度をしましてのち、おつかさ  
 んに話しましたところ、おつかさんがおつかさん、ワシントンが船へ  
 乗るを好みませんでしたから、其事はやめよとすゝめまし

た、たいてない若者なれば老母が止たとして自分でもひたつた事いやめにくいものですけれどもワシントンの母親の心を痛めるに忍びませんでしたから終に船乗になる事を思ひとゝりました此外まだワシントンの美性質をあらひすやうな話が多くありますけれどもあまり長話になりますからこれでおしまいにしませう

第三

風船の話

皆さんの風船を持って遊ぶのが、たすきですから風船のたはなしを致しましやう風船を始めて發明した人の法朗西國人にて紙職人モントゴルフルと云ふ人で御ざいます其人が一十七百八十三年(今より百〇八年前)六月五日に始めて造りました風船の木綿の袋に紙を張りたる大きな球で差經り凡そ三丈八尺ばかりで其總体の量目の二百五十斤ありました其袋の底へ穴をあけて其下で火をたきますと袋の内

の空気があつた、かになり脹れまゝから袋の外そとの空気より  
 の内の空気うちが軽かろくなりまして、すみやかに空中うちに昇のぼるやう  
 な仕掛しかけでありました、モントゴルフはじが始めてためしてみ  
 た時ときに、此風船このふうせんが地面ぢめんから十八町二十間の高たかさまでゆき  
 ました、其所そこで時侯じかうがさむくなりまして、急に袋ふくろの内うちの  
 空気くうきも冷ひへて原もとの場所ばしょから二十二町五十間程けんばさ距へたたつたる  
 所ところへ落おちました、此仕掛しかけで、袋ふくろの中なかに火ひが移うつりて乗人のりての死しす  
 る事こともありまゝから又また其後そのちやつぱりフランスひとの人ひとでロベ  
 ルトとチャアレスと云いふ人ひとが差さし経わた凡ひ一丈三尺二寸程ばさある風  
 船けんを拵こしらへました、此人々このひとの袋ふくろの内うちにある空気くうきをあつゝめる

かわりに水素すゐそといふ氣きを入いれしました、此氣このきの空気くうきより十四  
 五倍ばいもかるくありますから此水素このすゐそを入いると直ちかに風船ふうせんの昇のぼ  
 りまゝ、ロヘルトとチャアレスと二人ふたりの此風航このふうせんに乘のりて地  
 面めんより凡およそ八丁十三間程けんばさも昇のぼりまして、降おりやうとする時ときロ  
 ベルトの籠かごからをちました、すると風船ふうせんの量目めかたが凡およ五十斤きん  
 程ばさかろくなりまして、たから復昇またのぼりましてチャアレス一人ひとりで二  
 十丁十八間の高たかさまでのばりしたと、あなたがだも風船ふうせんに  
 乗のつてみたら御ございますか、風船ふうせんの御話おはなしをきくと面白おもしろそう  
 ですけれども又またこわい事こともありまゝよロベルトとチャア  
 レスト二人ふたりの又また千七百八十五年一月七日に風船ふうせんに乘のり込こみ

てイギリスからフランスへもぎました、其時フランス海岸より二十里ばかりの所で俄かに風船が重くなつてすでに海に落ちそうになりましたから二人はいそいで砂の嚢を捨てて錨網を切りましたけれども、やつぱり風船は昇らずますく海に落ちそうになりましたから、いそいで持っている荷物や道具や食料をみんな捨て、終にの着ていた衣物まで脱いで漸やくフランスへ着ましたと、當時おこなわれしたる風船の羽二重の長い袋でその上をゴムで塗り空気のもれぬやうにして袋の上へ網をかけて網の端には付てその索へ籃を結びつけてその籃に人ものり又諸道具など

入れるためにこしらへてあります、風船の中へ水素を入れるに別仕掛が盛りますし、又もつとくわしい、ときあかしもありますけれども、汝方の學校でくわしい事の先生から、をならひなさひますから私の風船の御話のこれでおしまいにいたしましやう





第四

學校へ行途にて遊んだ娘の話

或所にいつでも學校へゆく時、ぐづぐづしてはかつかさん  
に世話をやかせるメリーと云ふ娘がありました。が或朝母  
はメリーに向ひ

母メリーにたまへ、もふ學校にゆく時間ですよ

メリーはい、かつかさん、もうすこし、てゆきます、今人形の  
着物を着せていますから着せてままつたらゆきます

よ

母「たまへんいつでもそんなことをいつてはたくれるよ  
 おつかさんのおまへが此學年中度々遅刻することの  
 好みませんよ

メレいの母にせきたてられてしぶくしながら學校にも  
 きましたら、まだ授業のはじまる時間前でしたから、おつか  
 さんがあのやうにやかましくいわなければ人形に着物を  
 着せてしまつてから來ても、よかつたのにとぞんねんにか  
 もひましたまかし此メレいと云ふ娘のそバにやかましく  
 云ふ人がいなければいつでも時間があくれるのです其日  
 晝飯後學校に行途中ぶらく、あそびながらゆきますと、ど

もだちのネリへが、まどから顔を出して

子リへ「メレいさん一寸うちへきて私のあたらしい馬と車  
 を御らんあさい

とい、ましたからよろこんでうちへはいつて見ますと可  
 愛らしい犬が車を引ていましたから

メレい「まあ、い、車ですとどこでお買ひなされたの  
 子レ「はい兄さんに貰いましたよ、私の此間から風を引て  
 學校へ行れませんでしたから此車と犬とで内で遊  
 んでいましたよ、さあ人形をのせて引せて見ましょ  
 う

と云ふて二人共我を忘れてあそんでいましたから學校の  
ペールがなるのをちつとも氣が付ませんでした、しばらく  
してから、ネリへの氣が付て

子レへ「あなたは學校へ行のでか、時間があぐれましたよ

メレ一「それを何時です

ネリへの時計を見ながら

子レへ「もう二時です

メレ一「二時なら學校へいつてもどをせ、おそいからけふの  
もふゆきますまい

と云ひました、ネリへもあそび相手がなくなるものですか

ら、メレ一に學校にゆく事をすゝめもせず、又二人で面白く  
あそんでいましたところが、あやにくメレ一のおつかさん  
の其日の晝後學校を參觀に行きましたするとメレ一が學  
校にいませんからおとろきまして先生にいろくメレ一  
の行狀の事を問ひ心を痛めながら我家にかへる途中子レ  
へのうちの庭でメレ一の聲がきこへましたからメレ一を  
呼び出しました、メレ一の母の顔を見ておどろきふるへな  
がら、だまつていました、母はメレ一に向ひ  
母「メレ一や私と一同に直にうちにかいで  
といゝましたからメレ一はこわく母の後からもきまし

た、うちへはいると母ハメレ一を二階の部屋へ連れてゆきまして、おだやかに云ひますには

母「メレ一やあしたは土曜日ですからお前をお父さんの所に連れていつて、面白くあそばせやうとおもつたけれどもお父へがけふあそんでしまつたから、そのかわりにあしたまでよく勉強して今日のおこたりをおぎなはなければなりません

と云ひながら部屋の戸をしめて外から錠をおろして下へゆきました、其時メレ一はたまりかねてわつとなきだしました、お父さんの家へおかれなだけで、かなまゝのに牢

屋の如くどじこめられること、はたまらなくおもひました、夕方になつてから、おつかさんの御飯を、メレ一の居る部屋にもつて来て、そこにおいて

母「さあ御飯をたべて着物を着變て、おねよ

としづかに云ひました、メレ一はあまりのかなしさは何にもいわづ、唯だまつて、お祈りをして心淋しく其まゝねました、明の朝おきて見ると晴々敷天氣でしたから、なをお父さんの家へおかれな事を残念に思ひ昨日のあやまちを後悔して居處へおつかさんが戸の外から聲をかけて

母「メレ一やこれから一時間すぎたら来るからそれまで

に、地理書の暗記をしておきなさい

と云われしましたからなく、勉強をしていました、實に其  
一日は、メレーのためには永くかなしき日でありましたか  
ら成人したのちまでも決して其日の事の忘れませんでし  
た、漸く其夜になりておつかさんにあやまつておるしても  
らいました、其夜メレーのおつかさんに向ひ

メレー「どうぞあしたの朝早く、おきてそとへおかれるやう

に部屋へやの戸こをあけておいてください

とかなしそうに願ひました母は心こころの中でこのやうにきび  
しく、おしめるやうな悪しき行状ぎやうじやうをもふ此子このこがひないや

うにどのりながら部屋へやを出てゆきました、實にいましめ  
られる、子よりも、いましめる親おやの心こころに、せつないのですから、  
あなたがた、どなたも父おとうさんや、母おつかさんに心配しんぱんさせないやう  
になさいませよ

第五

一ツの金袋三人を殺した話

或時三人の悪徒が一ツの金袋を盗んで家に帰りまして、先  
 む悦ひに一杯呑うと云て、其内一人がさけさかなをかいに  
 出ゆきしがその途中で慾心をおこして、おもふには此酒の  
 中へ毒を入れて彼の二人に呑ませてやらふと悪だくみを  
 しながら歸へつて來ました、又家に居た二人のあやつが歸  
 へつて來たらいきなり打殺して片付てしまを、ぞして此  
 金を二人で分配やうと相談しましたから二人は其一人が

歸るのを待つてゐて、いきなり打殺してしまいましたから  
 先これに安心だといひながら其酒を呑み肴を食ひました  
 すると忽ち二人も死ましたと

第六

シヨンプライイトの話

正直と云ふこと何をするにも一番大切な心得です假令  
 へ幾億万圓の身代をもち尤も高い官爵に陞り他から讚め  
 そやされても若し不正直で得た富や位ならば全でないが  
 優です、どんなに貧乏でも正直な生涯をする方がイ、です、  
 此世に随分悪人で榮華功名した人も多いですが素と神  
 様の御支配なさる場所ですからマンザラ悪人ばかりが時  
 運を得ての居りません、正直で神様に能く事へ大事業を起

した人も尠くありません此シヨンプライイトと云ふ英國の  
 お方、五年前七十九歳で没になりましたが、その一生の間正  
 義を行なつて神の榮を顯されました、第一に此方の穀物條  
 例と云ふ悪ひ法律を廢する事に盡力つて幾百萬人の貧乏  
 人を救ひ、亦た英國が魯西亞と戦争を始めますときに英國  
 の人が大抵戦を望んで居るのに戦争の神の御旨でないど  
 云つて殆ど獨で反對しました、此方の名は實に歐羅巴阿米  
 利加に響き渡りシヨンプライイトと云ふと直に正しい人信  
 仰の厚い人、徳の高い政事家の別名の様になりました、其没  
 なつた電信が全世界に傳はつたときは亞細亞でも歐羅巴

でも阿米利加でも南洋の群島でも正直なことの好きな人  
 ハミンナ涙を流して悲しみました其筈です、シヨンブライ  
 トの生きて居た爲め正義の味方がドレ程心強く感したか  
 知れませんが、余は此方のことを汝方に御話し申す時、其數十  
 年の永き間彼方が正義ことゝの爲めに働き幾百万人の熱愛  
 する人となられたことを思ふと實に自然に涙が浮んで參  
 ります、實に人へ正直でなければなりません正直で事を成  
 遂てこそ本當の成功と申せまます、皆さんドーデスカ、ワシン  
 トンヤリンコルンヤシヨンブライトの様に正直にあつて  
 死後までも天下の人に仰がれるのへお好きですか若しブ

ライトヤワシントンヤリンコルンの様な精神になりたい  
 ならばよく其人々の傳記をよんで御らんなさい松村さん  
 の御書なさつたリンコルンの傳は汝のためになる本だと  
 かもひまます



## 第七

## リンコルンの話

あなたがたのリンコルンの事を、おき、なさいましたか、彼  
 の米國の人でワシントンの次に有名大統領です、此方のお  
 生れなさつたの、今より八十二年前てありました、大約本  
 をよむ人ならばリンコルンの名を知らない人はない位で  
 す、此様な有名人は定めしリツハな教育を受けた人であら  
 うと思ひなさいませしやうが、そをでありません、彼の極貧乏  
 な百性の子でしたからたゞ九月のほか學校へはおきま

せんでした、が、自分で聖書とワシントンの傳や天路歷程イ  
 ソップ物語杯を讀で知識を得たのであります、此等の本を  
 手に入るにも容易な事でありませんでした、彼が如何に  
 辛苦患難してワシントンの傳記一冊を得たるかを讀し時  
 に私のおぼへずなみだをこぼしました、今其わけをおはな  
 しもふしませしやう或日彼は隣家にワシントン傳記のある  
 をみまして、しきりによみ度になりましたから其本を借やう  
 ともおもひて、いくたびも隣家の入口までゆきました、けれど  
 も自分が賤い身ですから、かしてくれまいかとおもつて言  
 ひ出す事ができません、でした、けれど、モウ、こらへかねて

思ひきつて、隣家に入りて其書をかしてくださいと、もふし  
 ましたら主人も心よく貸してくれましたから、リンコルン  
 の喜悅一方ならずこおどりしつゝ、携へ歸りて大切に戸棚  
 に入置きました、ところがあいにく其夜ふきぶりで、戸棚に  
 雨がもり其本をぬらしましたから、リンコルンの心配の一  
 方ならず半時ばかり泣ひてゐました、其夜のをくねむ  
 りませんでした、しかしいくら心配しても考へてもしかた  
 がありませんでした、それから翌朝に至り隣家にもぎ、ありし次  
 第を正直に話し泣つゝ、罪をわびまして其代りに二日なり  
 三日なり私に勞役をさせてくださいとたのみました、貸主

もあへてとがめもせず其意にまかせました、此様にしてリ  
 ンコルンのワシントンの傳記を得ましたから、大によろこ  
 び家に持かへり、そのぬれよでれて文字も分らずなりたる  
 を、ていねいにほし一枚づゝ紙を分ちよめるやうに手いれ  
 をして其後の晝夜となく讀みまして終に大業をなすやう  
 な人物になりました、此事ハリンコルンの十三四才の時  
 あります、此一事を以ても彼が如何に苦學をしたかと云ふ  
 事ハわかります、又余程あわれみのふかい人でありました  
 彼が青年で代言人をしてゐた頃、或日青年の同業人四五人  
 と共に馬車にのりて或る田舎路を通かゝるとまだ羽根の

生はない雛ひな鳥とりが風かぜに吹ふきとばされたか、如何い云いふわけか路傍みちわたりに轉ころび落おちてチュ〜と泣ないて居ゐましたがリンコルンの朋とも友だちへこれを横目よこめでみましたけれども何なにともかものなかつたどみねて、そのまゝ見過みすにして由よしかふとしますると、リンコルンのあはて、飛とり下くだりましたすると朋友ともだち等はびっくりりして

朋友「オイ、リンコルン如何いして君きみの下おりるんだ

リンコルン「此この奴やつがあまり可愛かわいさふだから元の巢すの中なかへ入いれてやらふとおもふてさ

朋友「バカ〜うつちやつておき玉たまへそんな事ことのたび〜ある事ことだ日ひが暮くれると晩飯ゆふめしがなくなる、つまらない事ことはやめにして早はやくのりたまへいつまでも待まちてゐるとはできないサア早はやく

とまきりにせきたてましたけれどもリンコルンは之これを耳みみに入いれず上うへをむきたり横よこを見みまわしたりして巢すのあるところを探さがしてぬまを朋友ともだちへ怒いらつて馬車ばしやにむちうたせてドンドン先さきへいつてしましました、リンコルンはやつと巢すのある所ところをさがして雛鳥ひなとりを其巢そのすの中なかへ入いれて、またおちないやうによく巢すを直ただしてゐいてそれから朋友ともだちの後あとをおつ

て、歸りました、ところが朋友の最早旅店について晩飯をたべている最中でした。がリンコルンの入来るをみてみんな一同に口をそろへてサア恩人、馬鹿恩人がかへつてきたと大聲あげて笑ました、するとリンコルンは面色を正して

諸君笑ふなら笑ひ玉へ、僕はあのやうな可憐な鳥を見て見過にすることは、できないのだ、僕がもしあれを見すて、ゝゝゝいて君等と一緒に去つたなら、きつと今夜の寐られないにさういゝない  
と精神こめて云ひますと流石無情の朋友も耻かしくなつ

たとみはて、みんな黙てしまひましたと、小鳥に對してさへこんな愛憐の心がある人ですから、まして人間が奴隷にされて牛や馬のやうに使役のを見過にする事、リンコルンの性質として如何しても出来ませんでしたから、自分が大統領になつたとき正義をとなへて、とを軍を起しました、其戦を南北戦争ともふしまず、米國の北部で奴隷を廢止ると云ふ事を主張し、南部では奴隷を使役ことを主張して終に戦となりました、けれども北部にリンコルンと云ふ正義の大將があらりましたから、其戦は北部の勝利となつてとを、奴隷を禁止するやうになりました、我日本は帝

國こくですか大統領だいていりやうになる必要ひつようのありませんからあなたがた  
 の武官ぶくわんなり、文官ぶんくわんなり、商人しやうにんなり、百姓ひやくしやうなり、何でも自分じぶんに適當てきとう  
 な職業しよくまやうを撰えらんで正義せいぎのため力ちからを盡つくし、我わが日本國にほんこくの威光いこうを  
 海外がいがいにかゝやかせるやうに心がけて、リンコルンのやうに  
 愛國心あいこくしんの強い人ひとにおなりなさることをのぞみます

第八

人を疑ふ娘の話

或所あるところにお梅うめと云いふ娘むすめがありました其子そのこはいつでも他人ひとを  
 疑うたがつてなんでも他人ひとのせいにする娘むすめでしたが或時あるとき朋友ともだちの  
 お鶴つるがお梅うめに向むかひ

鶴つるお梅さん籠かごの中に鳥とりが居ゐませんよ

梅うめ「ソ、だれか逃にががしたんでしやうお鶴つるちゃんあなたで  
 しやう

鶴つる「アレ、うそ私わたくしは今見いまみたばかりですもの汝あながさつき餌えを

をやんなすつたでいありませんか

梅「エー、けれどもあの時の籠の中にぬましたもの、そんなら、きつと龜ちゃんですよ

鶯「それでも龜ちゃんば今日一度もきませんもの

梅「ソ、ソナラ、きつと下女の竹ですよ竹のほんどふに馬鹿ですよ

鶯「竹さんでもありません、鳥が自分で逃げたのでしやう

梅「そんな馬鹿な鳥がありますもんですか、きつと竹がにがしたにいちがひない

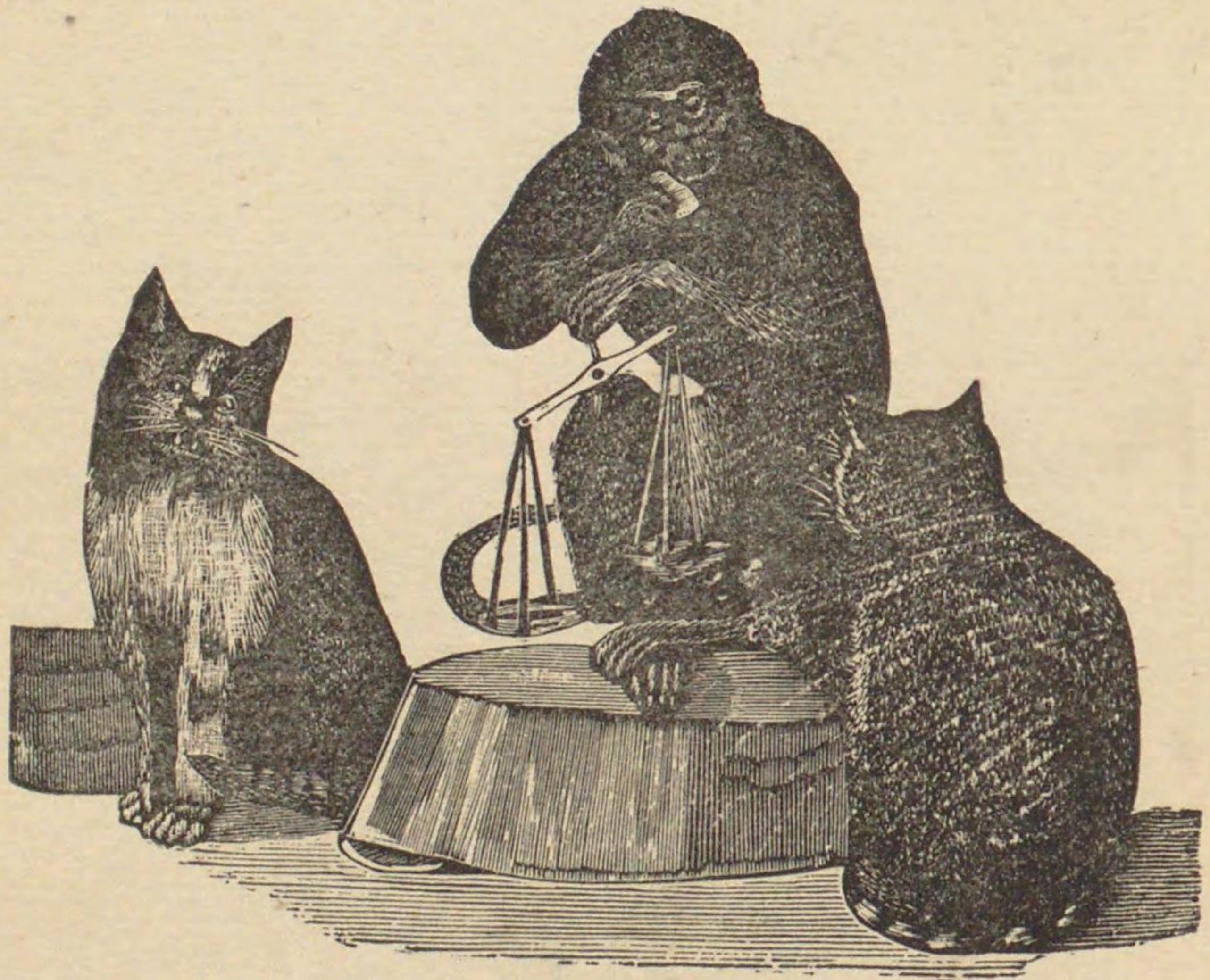
と大きな聲で怒て居ますと庭の本の上で一匹の小鳥が

小鳥「やかましい子供だお前がさつき戸をすかして置た

から私わたしの自分自分で飛びだしたのだ、お前まへの人の事を馬鹿

だと云いふがお前まへがよつばご馬鹿だそんなに人の事を

疑うたがふものではありませんよと云いひました



第九

馬鹿な猫の話

或時二匹の猫が、バター一カママリを盗んで来て、二匹で分配  
やうとまました、ところが互ひに少しでも、自分の方へ多く  
とりたいもんですから治まりがつかないで近所に居る猿  
をよんで来て分配方をたのみました、すると猿は得意顔に  
て西洋のはかりを持ちだしてきて、兩方の皿に半分位づゝ、バ  
タを入れましたところが一方が、すこしよけいだと云つて  
一つまみ口へ入れました、すると又一方が少し重くなりま



したから又多い方を一口たべました、そこで最初の分量よりの餘つばを減りましたから二匹の猫のおどろいて猿に向ひ

猫「私共は二匹で分配ますから、もうよろしう御ざいます、

どをぞ其バタを私共に返してください

と云ひました、ところが猿殿の首をふりてなかなか承知せず

猿「いやこれの裁判料に我がとるのだ

と云ひつゝ、みんな口へ入れてしまひましたと、此話の面白話でありますか、あなたがたも何かわかる時に中よく

しないで他人にとられて、馬鹿なめにありますよ

第十

他人の過失を見付けて自分の過失を知らぬ  
子供の話

或学校の教師が生徒に向ひ

教師皆さん自分の本に目を付なければいけない、どなたでも、よそみをする人があつたらしらせてくださいと云ひました、すると太郎と云ふ一人の生徒が心の中に彼の金太郎のいつでもよそみをするからあいつの顔をよき氣を付けて居てよそみをしたら先生にいつけてやりましや

うと思ひ其子の顔ばかり氣を付けていますと、やがて其子がよそみをしましたから直に先生に告げますと先生は太郎に向ひ

教師おまへの金太郎のよそみをするのを見付たときおまへの目は本を見ておりましたか

と静に問はれて太郎は顔をあからめて、一言も答をなさずたゞ下を向ひて耻かしそうにしていますと、汝がたも他人のあやまちを氣を付ないで自分の行状を、氣を付なさ

第十一

一ツ目人の居る島の話

或所あるところに一ツ目ひとめのある人ひとばかり住すまひして居る島しまがありまじ  
 た其所そのところへ二ツ目ふたつめのある人ひとが行ゆきまじしたが、一ツ目ひとめの人々ひとの  
 二ツ目ふたつめのある人ひとを見み指ゆびさして、アレ、御ごらんなさい二ツ目ふたつめのあ  
 る人ひと如何いかにも、醜みにくいものでないかと嘲あざけり笑わらったと云いひ  
 まするが、善人よきひとも悪人あしきひとの多く居る中なかへ行ゆきまじれば、却かえって  
 悪わるく言いはるゝものです

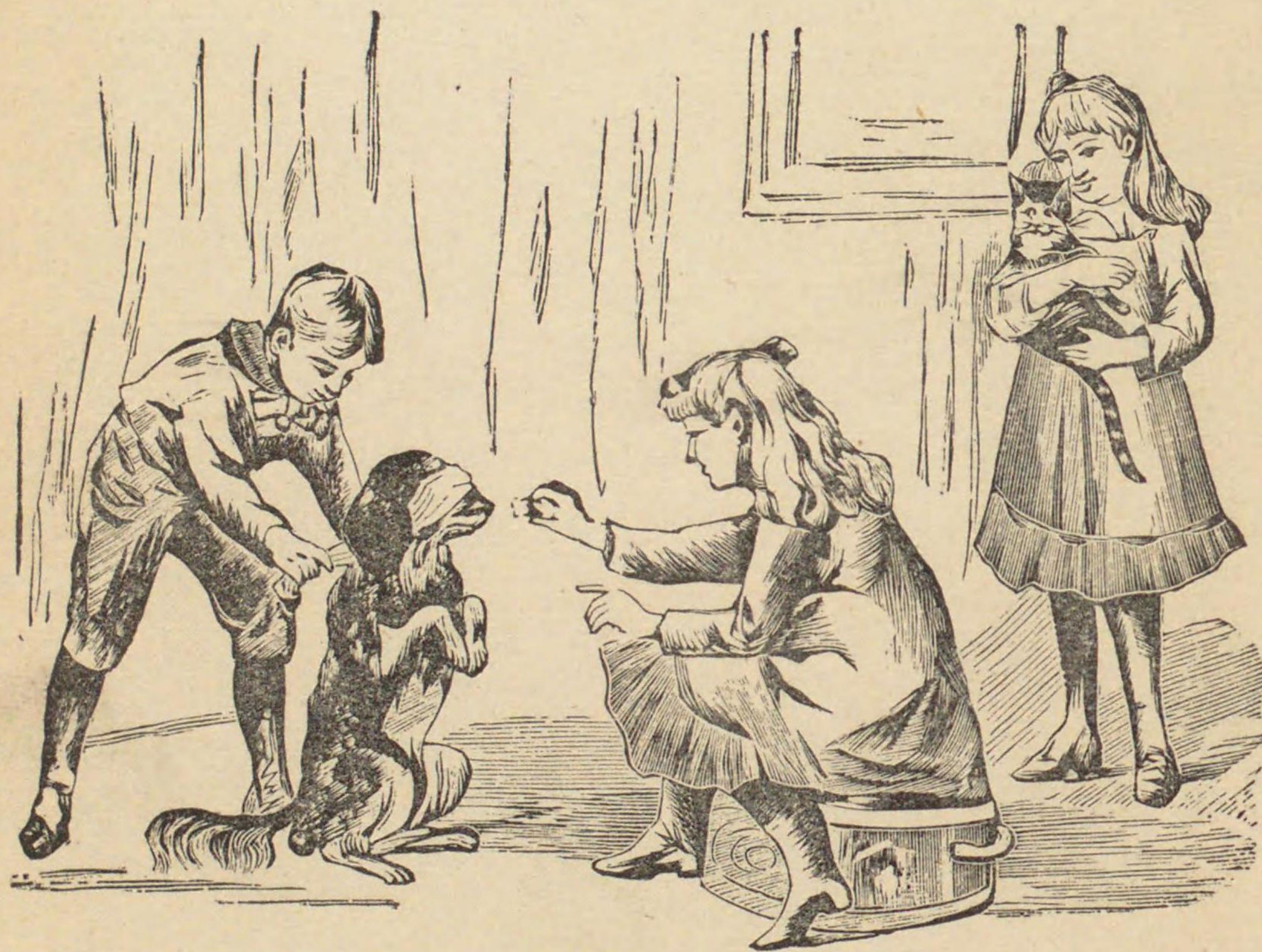
第十二

落第したる子供の話

或田舎あるいなかの子供こどもが小學校しょうがくこうの試験しけんにらくだいで力を落おして  
 家うちへ歸かへる途とち中大おほなる楠くすのの根ねへ腰こしをかけて休やすんでゐますと調てう  
 度たび其時そのときは晝飯ひるめし頃ごろでしたから其樹そのきに巢すを造つくって居る鷺わしが其  
 ひなを養やしなふために生魚なまうをを口くちにくはへて勢いきほひよくとんで來き  
 ました其邊そのへんの百姓ひやくせうたちは鷺わしが毎日まいにち生魚なまうをを獲とつて來る時ときを知し  
 ッてゐますから其樹そのきのまわりに寄集よりあつり居ゐて鷺わしが其巢そのすに歸かへ  
 り來る時ときに石いしを澤山たくさん投げあげますと鷺わしはあどろいて其口そのくち

にくひいてゐる生魚をおとしします(驚)の持ちて来る魚は  
 新敷ありますから悪敷人々は此様にして々度驚の魚をど  
 ります(此)時巢の内の雛の母鳥の歸り來りたるを見て各々  
 赤き口を開ひてチヨくどなきしきりに食物を求めます  
 と母鳥の其子に與ふる食物がありませんから如何にもか  
 なしそうな聲を發して幾度も巢のまはりをとびまわりて  
 ねりましたが、やがて羽根さばきをなして海邊の方へ一さ  
 んにとんで行ました其所から海邊迄の十里もありますな  
 れど驚の勢ひ強き羽根でとべばぞをさなく二十分計りた  
 つと驚の生魚を口に加へて歸り來て待兼たる子鳥等に充

分食物を與へ母子共によろこぶ有様を見て落第した子の  
 思には此様に失望して此所にすわつて居たとて仕方がな  
 い、それより彼の驚の如く氣をはげまして勉強すれば又昇  
 級する事が出来ると思ひ氣をとり直して勉強しましたら  
 次の試験にハ一級とび越して進む事が出来ましたと人は  
 一度失敗したとて失望せず勇氣を出して働けばきつと  
 目的を達する事が出来ます



第十三

各々異りたる天才ある話

或時アネーと云ふ娘がシヨンとアリスと云ふ二人の子供のあるうちへ猫をだいて遊びにゆきました、シヨンのハチと云ふ利口な犬をもつてゆましたからアネーを見ると直に

シヨン「アネーさん私の犬の目かくしをしておくれをさがすのが上手ですから、させて見せまじやう」と云ひながら手拭で目をしぱりますとアリスは、そばから

おくわしをもつてきて犬に、ははひをかゝせて其の菓子  
 箱に入れて單司の上へ、のせておきました、すると犬はざし  
 き中かけまわりて、とをくははひをかぎあてまして單司  
 のかんへ足をかけて口で箱のふたをあけて上手におくわ  
 しをだしました、アネーハチが上手におくわしをさがし  
 たのを見て感心して自分の猫に向ひおまへ、ををして、ハ  
 チのやうなげいができませんかと云ひながらふさぎのじ  
 めましたするとジョンの其様子を見てアチーに向ひ  
 ション「あなたの猫は鼠をとることが上手ですけれどもハ  
 チの鼠をとることのできません

と云ひましたそこへ、おバさんが、はいつてきて其話をき、  
 まして猫の鼠をとるのがつとめですから鼠さへとれば、よ  
 い猫ですと云ひましたからアチーも其ことをきいて自分  
 の猫の利口なことを知りて満足しましたと人間も其通り  
 人々だれでもちがひたる天才がありますから各々自分に  
 天から與へられたる才能のなんであるか、よく考へて見て  
 其才能を養ひそだて自分の本分を盡すのが一番です

第十三

雄鶏の話

或<sup>ある</sup>ところで雄<sup>に</sup>鶏<sup>どり</sup>が、けあひを爲<sup>し</sup>てゐましたが、そのうち一<sup>いっ</sup>疋<sup>びき</sup>の鶏<sup>に</sup>がまけて、一<sup>いっ</sup>疋<sup>びき</sup>の鶏<sup>に</sup>が勝ちました、負<sup>ま</sup>けた方<sup>はう</sup>はいかにも、へいこうして隅<sup>すみ</sup>のはうに、ちいさくなつて居<sup>お</sup>りましたが、勝<sup>か</sup>たはうはいかにも自<sup>じ</sup>慢<sup>まん</sup>そうにわざとたかいところに飛<sup>と</sup>あがり上<sup>うへ</sup>のはうを向<sup>む</sup>ひてコケコッコウと一<sup>いっ</sup>聲<sup>こゑ</sup>うたひましたら空<sup>そら</sup>から大<sup>おほ</sup>きな鷹<sup>たか</sup>が、飛<sup>と</sup>できて其<sup>その</sup>にはとりを攫<sup>つか</sup>み、どこへか飛<sup>と</sup>でもぎました、其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>まけた方<sup>はう</sup>の鶏<sup>に</sup>、すみのはうからソロ

くとはいだして自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の鷹<sup>たか</sup>にとられなかつたことを喜<sup>よろ</sup>こび、かひぬしのふところにだかれて自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のうちに歸<sup>かへ</sup>つたといふ話<sup>はなし</sup>があります、がなんでも世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>のこと、この通<sup>とほり</sup>で高<sup>たか</sup>ぶるもの、下<sup>さげ</sup>られますから本<sup>ほん</sup>がよく讀<sup>よめ</sup>ても何<sup>なに</sup>か、善<sup>よ</sup>くできてもけつして高<sup>かう</sup>慢<sup>まん</sup>なところをもつて、はいけません





第十五

感心な犬の話

或處の金持の妻君がいと可愛らしい小兒と其子の婢をつ  
れて蒸氣船に乗つて居ましたが此船が或湊でしばし定泊  
してぬたどきに婢がその子を抱いて甲板の上へ出ました  
すると小兒のひろくした所へ出ましたからたいそをよ  
ろこんでとび上りましたそのはずみにその子が海のなか  
へ落ちましたから守りつくりして大聲をあげました、す  
ると船中の人々の何事かとおもひかけつけて見ますと小

兒こゝろのもはや海中かみちうへ落おちてしまひましたから如何いかもする事ことも  
 できず、マ、ア、ア、とさけおばかりでしたおが其船中そのふねのなかに賢かしこ  
 い犬いぬを運つれて居いた人ひとがあらりましたからすぐ其人そのひとが婢めいに向むかひ  
 「何かあなの小兒こゝろの躰からだへ付ついていた品しながあればやくおだしな  
 さい」と云いひました幸さいわひ婢めいが手てに其小兒そのこゝろの前まえかけをにぎつ  
 て居いましたから直すくと其人そのひとに渡わたしますると其人そのひとの手てばやく  
 其前そのまえかけを犬いぬに見みせて海うみの中なかへ指ゆびさしをしますと犬いぬの忽たちまち海かみ  
 中ちゆうへ飛とび込こましたがしばらくすると此圖このずのやうに犬いぬが小兒こゝろ  
 の衣き物をくわへて水面みづのうへにおよぎあがつて來きました其時そのとき最も  
 早はや助たすけ船ふねの出でてぬましたからすぐに小兒こゝろと犬いぬを小舟こふねへひき

あげて無む事に本船もとふねへ移うつしました小兒こゝろが生いきてゐるのを見  
 た時ときの母親ははたやの悦よろこびの如何いかなる上じやう手てな筆ふでも書か盡つくす事ことの出で來き  
 ない程ほどでありました母はははおもはず小兒こゝろを抱だきしめて犬いぬの  
 頭あたまへキッスをしましたそして犬いぬの主人しゆじんに向むかひ「何程なにほどにても  
 價だを拂はらひますからぞをぞ此犬このいぬをおもづりなすつてくださ  
 いませんか」と云いひました犬いぬの主人しゆじんと其頭かしらをなでながら「此  
 犬いぬの何程なにほどにても賣うる事ことの出で來きませんと斷ことばりました「犬いぬも又  
 此人このひとの私わたしの主人かみしゆじんだと云いふやうな顔かほつきにて主人しゆじんにすりよ  
 りてすわつてゐましたと實じつに感心かんしんな犬いぬではりませんか、あ  
 なたがたもこんな犬いぬをおすきでしやう

第十六

蝸牛に教へられたる子供の話

或所に次郎と云ふ子供が板べいに寄りかゝり手に一冊の本を持ちてしくくゝないてゐました其所へ一人の婦人が通りかゝりまして此有様を見て何故ないて居ると問ひましたら次郎が云ひますに

次郎今日學校で先生が此本のうちから一ツの詩を撰んで次の土曜日に暗誦してこい其時一番よく出来た生徒にハほうびをやるぞおつしやいましたから私も

暗誦をおぼへたいとおもひますけれども友人が私のことにくすの次郎と名づけまます位ですから迎も私にハ、できないとおもふてないて居るのです

と云ひました其時調度カタツブリがヘいの下の方からはいあがる所でしたから其婦人は其カタツブリに指して

婦人「あれを御らんないあのカタツブリハ余ほどぐつゝ歩むものですけれども止ないで歩んでいますから終にハヘいの上へ行く事が出来まますあなたもあのカタツブリに習ひて毎日一行づゝ止めずに暗誦すれば乞度土曜日に迄にハ其詩を暗誦する事が出来まますよ

と深切に教へてもらいましたから次郎の其日から毎日お  
 こたらず一行づゝ暗誦をいたしましたところが次の土曜日が  
 きましたからみんな教場へ行生徒が一人づゝ立て暗誦し  
 まして次郎の番になりますと他の生徒がみんな顔見合せ  
 て嘲けり笑つて彼のぐづの次郎に何ができるものかと云  
 ひましたしかし次郎は立て一ツも間違はずに暗誦して其  
 日の一等賞をとりましたと假令おぼへのわるい子供でも  
 おこたらないで勉強さへすれば乞度おぼへられますよ

第十七

悪敷すくめに従ひたる子供の話

或時徳藏と云ふ子供が手紙を持つて急ぎの使に行く途中  
 で龜吉と云ふ友朋に逢ひました

「徳ちゃんおまへ、そんなに大急でどこへ行くのだへ面  
 白事があるから一寸おまちよ

「私は今此手紙を持って父さんのお使にステーションへ  
 行くんだから、またれないよ

「ステーションが逃て行きおしなないのに、そんなにいそ

がなくてもしいぢやないか

徳「けれども今日四時の氣車でニールヨクに立つ人に此手紙をたのむ筈に父さんが其人に約束をしたし、そうして此手紙の中にある金があるから此手紙が早く届かないとあつちで兄さんが困るから四時の氣車に間に合ないと大變だもの

龜「それでもまだ三時十分だもの一寸おいらの話も聞いても大丈夫かそくならないよ

徳「どんな話があるか

龜「おいらと一所に向の動物の見世物を見にゆかないか

徳「今此手紙を渡して来て歸りに也ころ

龜「歸りならもふ行かれなない其時分に他の用事があるもの

徳「そんなら明日にしやう

龜「明日もふ其見世物のかしまいになる今日限りだもの

徳「そりやあ困ったな、そんな動物の來た事を今までちつとも知らなかつた幾個居るか

龜「ソリヤ一澤山居るぜ北極の白熊もある象もあるし又美敷な犀がいるぜ

德「私わたしのいつか犀さいを見たが可笑おかしな毛けものだよ

龜「虎とらもあるぜ

德「そふか私わたしの虎とらを見た事ことのない

龜「黄色きいろのところところに黒條くろいすじがあつて、そりやされいたよ、そを

して虎とらの子こが遊あそんで居いる所ところの調度てうど猫ねこのやうで面白おもしろい

よア、ア、あの聲こゑをお聞ききあれ、獅しの哭聲なきごゑだよ

德「大おほな聲こゑだことみんな見みるには何分位なんぶんぐらゐへかゝるかへ

龜「三十分さんじふぶんのかゝらない位くらいいだ、そうしてこゝからステー

ション江行えゆくのに走かけて行ゆけの五分ごぶんかゝらない位くらいいだ

德「猿いが居いるかへ

龜「居いるとも居いるとも澤山たくさん居いるぜ、そりやあ面白おもしろ顔かほをした

り種々しるしな戯げいをするよ

德「入いつて見みたいけれども氣車きしゃにをくると大變たいへんだからど

をしやう

龜「大丈だいじやう夫ぶだと云いふのにあの大時計おほときけいのいつでもすすんで

いるんだ、そんな事ことをして考かんがへて居いるひまには半分位はんぶんぐらゐ

見みてしまふのに

德「そんならはやくはいろふか前木戸まへきど錢せんがあるかへ

龜「おいらは誰だれか金かねを拂はらふ人を一人ひとり連つれてゆきさへすれば

無な錢せん見みせてくれるんだよ

徳「木戸錢の二十五錢だねへ、此かくしの中へ二十五錢金を一ツ入れて置た筈だッけへ

と云ひながらハンケチーフを引出す時に手紙の落ましたけれども徳藏の氣付ずに龜吉と一同に急いで見世物小屋にいらりますと調度そこへ徳藏の父さんの通りかゝりまして其手紙をひろいあげて行きましたそれからすこしすると徳藏と龜吉の小屋から出てきました

龜「徳ちゃんお前はん半分も見ないでたゞ心配バツかりしてぬたぢやないか

徳「龜ちゃんお前へあの時計のぼんどにすゝんで居かへ

龜「どふだかよく知らない、たいていすゝんでゐるかも知れない

徳「お前あの時計のきつとすゝんでゐると云つたぢやないか、そんならきつと時間にくれたにちがいない

徳「そんな事を云つてゐるひまに早くおいでよー

徳「ヲヤ手紙が失なつたサア大變だ

龜「そちらのかくしを御らんよー

徳「どこにもない、どうしたらいい、だろふあの中に多くの金がいっていたのに

龜「あゝきつとあの象が、かくしからだして、とつたらふ



徳「ひとをそんなめに合せておいて笑い事ぢやないぞふ  
しても今一度小屋の中に入つてさがしてこやう

龜「もふ一度木戸錢を拂ひなければいけないよ

徳「私の動物の事を聞かなければよかつたけ一氣車の事  
ばかり考へて居たから見物を見てもちつとも面白事  
になかつた而して手紙もお金もなくしてしまつて父  
さんにどんなめにあふだろふ

龜「そんな事を心配しても何にもならない父さんに其事  
を云ひさへしなれば知れないぢやないか

徳「兄さんがあとで金が届ないと云つてよこすもどふの

しても知れずにいまい

龜「それでも彼の時手紙のたしかに彼の人に渡したと云  
ひさへすればいぢやないか

徳「そりや虚言だから云ひれない

龜「お前の余程馬鹿だ虚言さへつけばなんにも心配する  
事はないのにあすこへお前の父さんが来たおいらが  
上手に虚言を云つてやるからおいらの云ふ事を聞き  
よ

父「徳藏お前の先程走って行たから時間に間に合たろふね

龜「徳ちゃんの手紙を持って行つた時に調度瀛車がでるところでした

父「龜吉お前も一同に行つたのかへ

龜「エー私も一同に行つて彼の人から手紙を受取てかくしに  
入れるのを見ましたからきつと届きますよ

父「徳藏お前の黙つて立て居るがどふしたのかへ

徳「父さん私の如何にしかられてもぶたれても虚言をつ

くことのできません私の龜ちゃんを見世物を見に行  
まして手紙をなくしました

龜「徳お前によッぽどまぬけだ、そんな正直の事を云つて

父「此悪敷子供が私を欺むけどお前におしめたのだらう

お前が虚言をつかなかつたから手紙の十本あくして

も父さんのよろこぶよ、そんなになかないでもいゝこ

ツちへおいで父さんの先程こゝを通りがゝつて彼の

手紙をひろつたから直にステーションに持て行て間

に合たし、またお前も此悪敷子のすゝめに従ひ虚言を

つかなかつたから今日のもるすけれども此後此子と

遊ぶと決してゆるさないよ

と云ひながら龜吉に向ひ

貴様へわるいやつだ此子が汝にしたがはなかつたの

をよころぶ貴様の母親がたのむから内の店で雇つて  
 やろふと思つていたが、もふそんな不正直なものに決  
 して雇はぬ又再び我家に來ることはならぬ  
 と云ひながら徳藏の手を引ひて家に歸りましたと此話の  
 通り虚言程わるい損なものにありません、いくら上手に虚  
 言を造りてもきつと分りますから汝方もいくら其一時都合  
 がよくつても虚言をついてはいけません虚言をつく人  
 に決して出世をする事ができません

第十八

感心を子供の話

ロベルトと云ふ十一歳になる子供がありました彼は  
 一ヨクの或金持の息子でした、けれども父さんが大金を損  
 して後病氣になつて死しました、ロベルトの兄弟の五人で彼  
 は次男でしたから母さんが朝から夕まで骨を折つてもな  
 かゝ五人の子供を養ふほどの金にとれず毎日心配して  
 いました、ロベルトに此有様を見てさふかして母さんの手  
 傳をしたいと思ふて居ました或時ロベルトに外から歸つ  
 て來て兄にむかひ

ロベルト「兄さん今日あの大通の角で私ぐらいな子が沓をみがいて居たから毎日幾何金が取るかと思つて聞いてみたら毎日大約二十五錢位金が取ると云つたから私も明日から沓みがきに出やうとおもふぞふでしやう兄おまへの貴人といわれた人の子だのにぞをしてそんな、賤しい業がされるものか

ロベルト「兄さん私は貴人の子だから他人の厄介にならないで自分で出来る働をして母さんを助ける筈だともふから他人の何んど云つてもかまわな母さんのよろこぶ方がい、から明日から沓みがきをいじめると

云ひて翌朝はやく起て物置から古ひ石炭箱を出し、つかひかけの沓墨とはけとを持って人通の多い所に出て客を待つて居ました。十二時になつても一人も、みが、せる人へ来ませんでした。けれど午後又同じ所に坐つていました。一人の人が来て一足みが、せましたから五錢の金を得てよろこび歸りて母さんに渡しますと

兄「おまへのあんな賤しい業をしてたつた五錢ばかり、もふけても、なんになるものか

ロベルト「あの立派なローマも一日でい出来ませんでしたから私も長く辛抱すれいさつと後に多くお客か来るや

うになります

と云ひ其翌日もやつぱり同じ所に出ていまして其日から三日の間一人も客がありませんでした四日目にはじめての日に来た若い人が来まして

客 「子藏をだか客があるか

ロベルト「いゝ、汝の外一人も客はありません

客 「なんでも一ツ所に辛抱していれば其内の人々が知るとだんくみがかゝせるやうになるよ、今日は私の沓の游泥だらけだから十銭やるからきれいにみがいてくれよ

ロベルト「やつぱり五銭でよう御ざいますからまたみがいてください

と云ひて五銭で叮嚀にみがいてやりましたすると其翌日其人の話を聞いて五人の若い人が、みがゝせにきましたそれからだんく多くの人が来るやうになつて終に一圓以上とれるやうになりましたから、日少づづのこして其ためた金を資本にして立派な商人に成りましたと汝のそれの米國だから、できるけれども日本でできないとかもひなさるかも知れませんが、ヤツパリ日本でもできます私の知つている一人の子供が十二のとき父さんが俄に貧

乏まになつて小學校をやめなければならぬやうになりました  
 した其時そのとき其子そのこの金をかして高等小學校を卒業そつぎやうしたいとおも  
 ひましたから、毎日まいにち學校から歸かへると、こんにやくを賣うに行ゆ  
 ました毎月まいげつ一圓いっげん以上の金かねをもふけて學校の月謝げつしやを拂はひ又また  
 入用いりやうの本ほんを買かひまして高等かうとう小學校せうがくこうを卒業そつぎやうしてから電でん信しん  
 技師ぎしの學校へはいりて其學校も卒業そつぎやうして今いまでハ立派りっぱな人ひと  
 になつています、又もふ一人ひとりの知しつて居いる人ハヤツパリ父おとう  
 さんが貧乏びんぼうでしたから郵便配達ゆうびん配達や新聞配達しんぶん配達をしながら學が  
 問もんして今いまハ米國ちめりかの或ある大學だいがく校こうで勉強べんきやうしてはいますが其人ひとも後い  
 立派りっぱな人になるだろうとおもひます、此本このほんをよむおかた  
 には立派りっぱな人になるだろうとおもひます、此本このほんをよむおかた

のうちで立派りっぱな教育きやういくを受うける事ことの出來きる方かたと仕合しあ合あひすけれ  
 ども多假貧家たかひんかに生うまれても志こころざしさへあれば、きつと世よに用もちひら  
 るれやうになる事ことができます、精神せいしんが貴たつとければどんな賤いやし  
 い業わざをしても決けつして其賤いやしいわざが其人ひとを賤いやしくいた  
 しませんから何なにをしてもし、から志こころざしを立たてるやうになさる  
 事を望のぞみます

第十九

佐久間格次郎の話

私わたくしの知しつて居いる人ひとに佐久間格次郎さくまかくぢろうと云いふ人ひとが  
 其その人ひとの面おも白しろい陽やう氣きな人ひとでしたが或ある時とき多おほくの人ひとが集あつつてい  
 ろくな話はなしをしています時とき其その格次郎かくぢろうと云いふ人ひとが急きやうにいや  
 む顔かほをして悲かなしそうになりましたから、どふなさいました  
 と私わたくしが問とひましたら其その人ひとの黙だまつて居いましたが、しばらくし  
 て話はなしますに、私わたくしの父ちちの佐久間象山さくましやうざんと云いふ人ひとで早はやくチラン  
 父ちちの學問がくもんをしましたから外がい國こくの事ことをよく知しつて居いまして  
 日に本ほんの人ひとも早はやく外がい國こく人じんのやうに、ならねばいけないと云いつ

て西せい洋やう風ふうをすくめましたが其その頃ころまだ多おほくの人ひとは外がい國こくの事こと  
 を知しりませんでしたから私わたくしの父ちち親おやの悪あし敷ま人ひとのやうにおも  
 ひ、私わたくしか十じゅう一いちの時とき父ちち親おやの人ひとに殺ころされました其その朝あさ一いつ旦たん門もんを出  
 てまた、こもぞりして來きて私わたくしを呼よひ馬うまの轡くつはを直なせと云いひ付つけ  
 ました、其その時とき私わたくしの面おも白しろい遊あそびを、しやふとおもふ所ところでしたから  
 呼よべたのが服はらが立たちし故ゆへふしやうぶしやうに轡くつはを直なしま  
 したが其その日ひ其その馬うまで出い行ゆきまもなく殺ころされました實じつに其その時とき  
 が此この世よの別わかれとは夢ゆめ知しらず父ちち親おやの云いひ付つけを機き嫌げん克よくなさゞり  
 し事ことを殘ざん念ねんにおもひ其その後のち常つねに其その時ときの事ことを思おもひ出だすと如ごとく何なに  
 な面おも白しろい時ときも忽たちち心こころに憂うれいを生しやうじけ今日けふのやふに不ふ愉ゆ快くわいとなり

ますと語られまじした實に人の命ほどとかないものあり  
 ませんから汝も常に父さんや母さんの命令に心よく従ひ  
 何時どのやふな事が出来ても後で本心のとがめのないや  
 うになさいまし

第二十

大晦日の話

私の知つてゐる勝太郎といふ一人の児童がありました此  
 児童の家は金物屋で多く雇人もあり何不足なく暮してゐ  
 ます其児が十二歳の時大晦日の晩鎌倉がしを通ります  
 と十一二歳の児童が地面に坐つて泣いていますからどふ  
 したのかと、おもひ其子の側へいゝて見ますと其子、はだ  
 しで風呂敷包と、びんのかげを持つて居ますから「なぜ泣い  
 てゐるのかおまへの家の何所か」といろくたづねますと  
 其子が云ひますには「私の家のちぎ向ふのうちですが母さ

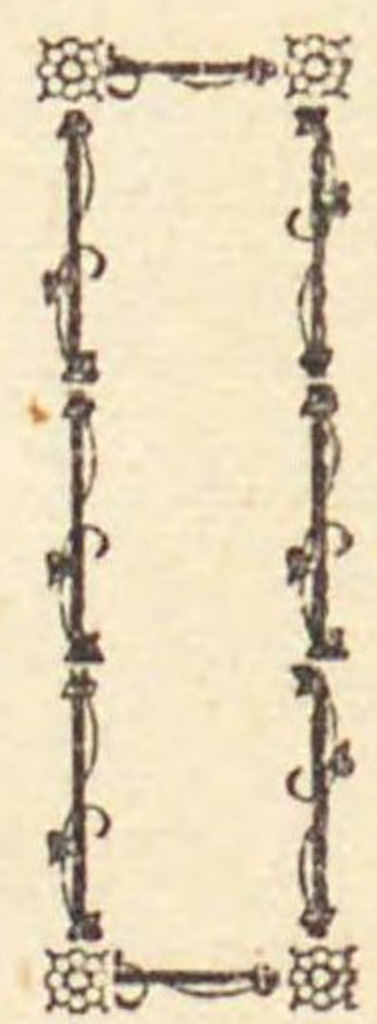


んが長く病氣で父さんの人力車を引いています、今日二十  
 錢とりて来ましたから其の金で米を二升買ひ其のつりだ  
 け醬油を買ひにぎりましたが、家で妹や弟がひもじいと云つ  
 て泣ひていましたから早く持て歸いろふと思つて、かけて  
 きましたら、すべつてころびお米のみんな此ぬかる中にて  
 ばれ醬油のびんのわれてまいました、ヤット今お米のひ  
 ろいしましたけれどもどろだらけで直に炊く事のできず醬  
 油はひろわれまいからどをしやうと思つて泣いていまし  
 た勝太郎の此話を聞き可憐そふだとおもひ直に其子を自  
 分の家に連れていつて自分が明日(元日)紙鳶を買ふと思ひた

めておいた二十錢を出してやり又自分の古い下駄をやり  
 ました、其子の名は吉藏と云ひましたがこのおもいがけない  
 仕合を大そうよろこんで其金でお米も醬油も買ひ幸ひに  
 元日をむかへました其吉藏は其後又いろくな苦勞をし  
 ましたけれども元來正直ものでしたからだんく出世し  
 て立派な商人になりましたが其大晦日の晩に勝太郎にも  
 らつた二十錢の事お忘れませんでしたから、毎年大晦日に  
 みかん一箇を勝太郎の家へ送つて其親切を記念しました、  
 其時勝太郎が紙鳶を買へば二三日の楽しみでした、吉藏  
 に恵んでやつたの、長い楽しみになりました、世間には今

日も吉藏きちざうのやうな憐あはれな子供こどもも随分ずいぶんありますから、汝あなも出来できるだけの慈善じぜんをするならばきつと天帝かみさまの汝あなに幸福さいわいをお與あたへなさいます

明治廿五年十二月十三日印刷  
 明治廿五年十二月十六日出版



版權  
 所有

著者 東京淺草區鳥越町 櫻井 近

發行兼印刷者 東京築地二丁目廿二番地 栗本長質

印刷所 東京々橋區彌左衛町一番地 東京印刷會社

發行所 一一三館

大賣捌所

東京警醒社 十字屋 池田書店  
 書肆東京堂 南海堂 信文堂  
 大坂梅原龜七 吉東書店 柳原書店

